ちょっと名大史

225

変わりゆく東山キャンパス四谷通西側エリア

現在、東山キャンパスの四谷通西側エリア（IB電子情報館と学生会館の間の一般道路に面した一帯）の景観が大きく変わろうとしています。

2020年に入って、3月にオークマ工作機械工学館が完成するとともに、9月からの工事で工学部7号館のA棟の一部とB棟が取り壊されました。ここには、PFI法に基づいて民間の資金や手法を活用する事業として、「名古屋大学（東山）地域連携グローバル人材育成拠点施設」が整備されます。

今回の整備の前にこのエリアの様相が劇的に変わった時期は1970年代です。このエリアには、1940年代前半に東山キャンパスの整備が始まった当初から、工学部の実験棟が建てられました。しかし、戦時中であったため、いずれも突貫工事による木造の粗末なものでした。

戦後、東山キャンパスにも鉄筋コンクリートの建物が増えていきますが、このエリアの校舎は木造のままで、引き続き工学部の実験棟として使われていました。このエリアにはそのほか、1960年に中央食堂がオープンしました。

そして1971年2月、工学部7号館のA棟とB棟が相次いで竣工しました。この時に中央食堂の建物は取り壊され、B棟の西側の一部で営業するようになりました。さらに1977年3月には、前回取り上げた北部厚生会館が完成しました。なお、同館の建築にあたって、東山キャンパスにおける最後の木造校舎であった工学部5号実験棟が取り壊されています。また、1980年12月には、工学部7号館B棟の増築工事が完了しました。

その後、小さい変化はありながらも、基本的にはこの景観が40年続くことになりました。多くの卒業生にとっては、その印象が強いものと思います。

1 四谷通西側エリアに建てられた直後の工学部実験棟（写真を左右に通るのが現在の四谷通）。
2 工学部7号館建設直前の同エリア（1969年頃）。
3 1970年代の整備が終わった直後の同エリア（1981年頃）。
4 工学部7号館が取り壊される直前の同エリア（2020年8月撮影）。
5 工学部7号館が取り壊された同エリア（2020年12月末撮影）。ここには、地上8階建ての教育研究棟と地上2階建ての福利厚生棟が建設される。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学基金のご案内 名古屋大学が優れた人材輩出や世界的な研究成果により、今後も日本や地域に貢献し続けるには、安定した独自財源が必要です。「名古屋大学基金」はその基盤であり、皆様からのご寄附を、さまざまな事業に活用させていただきます。何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

創基150周年、世界で輝くために

新型コロナウイルス感染症対策緊急学生支援基金ご支援のお願い

現在、新型コロナウイルス感染症が世界中で蔓延しており、健康医療は言うに及ばず、私たちの社会活動に広範かつ深刻な影響を及ぼしております。名古屋大学の学生への影響も甚大であり、学ぶ意欲をもちながらも困窮している学生の支援や、遠隔授業等の学習環境整備により、質の高い教育活動を維持するため、ご支援をお願いいたします。

Webでもご寄附を受け付けております。

https://fundexapp.jp/nagoya-u/entry.php?purposeCode=110000

ご寄附のお申込み、お問い合わせはDevelopment Office（DO室）あて（電話052-789-4993、Eメールkikin@adm.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。

■ 詳しくはホームページをご覧ください。
名古屋大学基金 https://kikin.nagoya-u.ac.jp/
アクセスはこちらから